

和歌：文苑

著者	稼堂，不老庵主人，巴城，溪川，學人，萩露
雑誌名	龍南會雜誌
巻	37
ページ	59-60
発行年	1895-06-07
URL	http://hdl.handle.net/2298/4588

いとよし

稼堂植批

日本魂

稼堂

師木嶋の大和心ははるの花秋の霜にそあるへかりける

野寺藤花

撞きいつる野寺の鐘にゆらくかな風なき庭の藤波の花

硯友會の席にて

窓あけて打なかむれば淺緑のこそいはれね卵の花の頃

阿彌陀寺にて躑躅花を

綾にしき錦にあやの岩つゝしはなのうてなや御佛の國

高田氏の芍薬を見にゆきて

いよす垣内外うちとに匂ふ芍薬のはなに心のへたてなのよさ

客居夏日

青柳の長さ日あかす文みれば旅の浮寝の言のはもなし

栗屋君のこまかりたるをいたきて

ことしのこ墨染にさけ白雲の立田のはなよ心ありせば

世の風雲(硯友會席題)

不老庵主人

風さわき雲わきかへる世なりとも動ぬ石の心こそせめ

阿蘇山

朝な夕な見れどもあかぬ知らぬ火の國を鎮めの阿蘇の神山

遠山雲多

巴城

夏來れば阿曾の遠山やまなして朝な夕なに雲のたちたつ

暮春卯花

溪川學人

我宿の垣根卯の花さきにけり春はてかたになりやしぬらん

酒

酒のこて酔ひさらませは世の中のふみやきすてゝ死なましものを

寄鶯述懷

うくひすの 鳴く聲きゝて 世の中は 春とそ見ゆる ますらをの 我はたい
らに 幾年か蓄へ來つる 村肝の これの心は はた又如何に

うくひすの鳴かさらませは唐衣春いつ來なんうくひす鳴かすは

友人と松蔭に酒酌けるをりよめる(今様)

萩露

松ふく風の音きよく 語らふ友のへたてなく かたみにかす杯に 千世の影を
ふ契かな